多 摩 織

Tama Fabric

澤 井 栄一郎

1. はじめに 多摩織とは

多摩織は、八王子市そしてあきるの市の一部の地域で伝統の技を駆使して作られる絹織物で、1980年(昭和55年)に、国の伝統的工芸品に指定された。多摩織の特徴は、しわになりにくく、軽い製品であること、そして洗ひ実用的な製品が多く、洗練されたデザインも取り入れていることである。

本糸(生糸)・玉糸(2匹の蚕によって作られた繭を解いた節のある糸)・真綿の紬糸(繭をほぐして作った真綿を紡いで糸状にした糸)という3種の糸を組み合わせ用い、御召織(おめしおり)・風通織(ふうつうおり)・紬織(つむぎおり)・線り織(もじりおり)・変り織(かわりつづれ)の5種類の織物を生産している。

多摩織の生産工程の特色は、分業にある。織物業、意匠紙業、糸染業、糊付業、整経業、緋加工業、捺染加工業、撚糸業、機拵業、整理加工業といった工程ごとに分化し、専門化した職人が多摩織独特の洗ひ味を作り出している。最近では、洗練されたデザイン、新しい感覚、優れた技術を取り入れつつ伝統的な手作業により特色のある優れた製品の生産を続けている。

2. 多摩織の歴史

八王子織物の歴史は古く、史実をひもとくと平安時代、延喜式に武蔵国では生糸や絹などを租税として納めていたことが記されている。したがって平安時代末頃から絹が織られていたのわかる。

そして、諸国行脚(あんぎゃ)に出た西行法師(1116~90)がこの地に立ち寄った際、「あさ川をわたれば富士のかげ清くくわのみやこに青あらしふく」と詠んでいる。ここからこの時既に八王子は養蚕の町であったと考えられる。

室町時代後期、多摩川のほとりにやってきた北条氏が、

領民の産業として奨励したことで産地として形が整った。戦国末期の北条氏照(1540~89)の時代には、「八王子八景」の詩歌に「桑都青嵐」が詠われ、養蚕や機織りが盛んに行われていた様子がうかがわれる。

天正18年(1590年)豊臣秀吉の小田原城攻めで、その支城八王子城が落城、八王子城下にあった現在の町名にその名を残す横山、八日市、八幡の三宿が甲州街道(現国道20号線)の両側に移転させられ、市(いち)が開設されるようになった。

「かいこ(蚕)飼ふ桑の都の青嵐市のかりやにさわぐ諸びと」これは、天正年間(1573~92年)における八王子城下の市場の賑わいを歌ったものである。このように、江戸時代には毎月4の日と8の日に定期的に絹市が立ち、地元だけでなく周辺地域からも生糸や繭、絹織物などが集まった。

江戸時代、正保2年(1645年)に開板された俳論書「毛吹草」には武蔵国の特産物として「滝山横山嶋」があり、紬嶋が八王子織物の特産物であったことがわかる。江戸の繁栄に伴って中頃には、きもの地の産地として飛躍的な発展を遂げた。

高機(たかばた)とその技法が、京都西陣から桐生・足利を経て八王子界隈に伝えられたのが文政年間の頃(1818年)といわれており、その時桐生、足利から移住してきた技術者によって、博多織(帯地)など先進の機織の技法が伝えられた。

また、周辺の村々の農家では、養蚕、製糸の、副業として、主に縞模様で織った先染絹織物がつくられはじめ、江戸後期には、『色八丈織物仲間』と称する機屋(はたや)同士の株仲間が組織されるなど、専業機屋として独立した経済活動をおこなうようになった。

明治時代に入るとジャカード機や力織機を導入するなどして近代化を図り、現代産業への転身に成功した。その一方で、数百年の歴史を伝える織物の技法も守り続けた。

動力織機の導入普及による工場制生産と分業体制が形成され、近代的産業として確立していった大正、激動の昭和を経て、平成の今日に至っているわけだが、昭和20年の終戦の直前、戦災により市街地の8割が被害を受け、殆どの工場が灰燼に帰した。戦後の織物業界は、そこから出発している。

八王子織物工業組合の歴史は、その前身である「八王子織物同業組合」が明治32年に重要輸出品同業組合法に基

EIICHIRO SAWAI

八王子織物工業組合

多摩織伝統工芸士会会長

〒192-0053 八王子市八幡町 11-2

Tel: 0426-24-8800 Fax: 0426-25-5478

づき機屋をはじめ買継商、燃系といった関連業者も含めて約 3900 人で設立されたことにはじまる。当時は、化学染料の乱用による織物品質の低下が織物問屋等から指摘され、組合や染色講習所(現東京都立八王子工業高校)の設立もこの粗製濫造の防止に大きな目的があり、業界関係者はこれを克服すべく一体となって取り組んだ。

その後、昭和 15 年の同業組合の解体、戦時中の青梅・村山の各産地も含んだ統制組合時代を経て、戦後の昭和 25 年に「八王子織物協同組合」に名称変更し、さらに昭和 33 年に現在の「八王子織物工業組合」に組織変更して現在に至っている。

3. 多摩織の 5 つの品種

多摩織にはお召織(おめしおり)、紬織(つむぎおり)、風通織(ふうつうおり)、変り織(かわりつづれ)、絞り織(もじりおり)の 5 品種がある。伝統的に渋い実用的な作品が多く作られてきたが、いずれも、工程の重要な部分は、熟練した職人の手作業によって行われる伝統ある織物である。それぞれの織物にさまざまな魅力がある。

3.1 お召織

お召織は先染めまたは先練りの平織、綾織もしくは朱子織(しゅすおり)または変化織で、表面を覆う細かいシボ(しわの 1 種)が特徴の織物である。緯系(よこいと)には 1m あたり 3000 回という強い撚りをかけた系を用いる。これは、下撚(したより)の後、わらび粉及びひめ糊を手作業でもみ込み、八丁撚系機(はっちょうねんしき)で右撚と左撚に同時に撚(よ)り上げるものである。右撚りの緯系と左撚りの緯系を交互に使い、系の撚りが戻る力を利用してシボを作り出している。撚られた系で織った後、シボを浮き上がらせるために湯の中でもみ、幅出して仕上げる。

お召織は全国の伝統芸能に従事する人たちの需要が高い。系に特殊な強い撚りが入っているため、その反物で仕上げられた着物はしわにならず滑らか、所作がしやすいのだ。とくに能や歌舞伎の仕舞い、踊りなどに使われることが多い(図 1 参照)。

図 1 つづれお召織

3.2 紬織

微妙な凹凸から生まれる風合が特徴の織物である。その風合は、緯系に玉系あるいはつむぎ系を使うことによって作り出される(図 2 参照)。

図 2 手織郡内紬

3.3 風通織

織地が二枚重ねになって模様を表現する織物である。表面の模様の色が、裏面の地色になる、リバーシブル構造に特徴がある。

3.4 変り織

縞織(つづれおり)とも呼ばれる朱子織の変化した織物です。多色の緯系を使って、絵のように複雑な模様を織り出す。変り織は緯系に 3 回撚のモール撚系を使うことで、手織独特の風合いをだしている。

3.5 絞り織

経系どうしが揃みながら緯系と組んで、系と系の間に隙間のある織物である。レースのような透明感があり、夏の着物や帯などによく用いられる。絞り織は、別名粋紗ともいう。暑い季節でも涼しく、かつ立ち居振舞いをしてもしわにならない、粋な紗、ということである。

4. 多摩織ができるまで

多摩織は、先染・先練の織物である。使用する系は、生系・玉系・真綿の紬系の 3 種類で、織り方により先に述べたように、お召織・紬織・風通織・変り織・絞り織の 5 つに分かれる。いずれも、主要工程のほとんどが手作業及び機械織りによる。

4.1 精練

袋に生系を入れて中性洗剤で煮出し、表面を覆っている膜(にかわ)質を取り除き、固い系をやわらかくして光沢を出す。水洗して乾燥させ、練り系にする。

4.2 図案づくり

紬織やお召織などの柄を考え、配色して図案を描く。この図案をもとに、織り組織と紋様を意匠図に描き込む。

4.3 染色

4.3.1 染色

竿に通した練り糸を染料の入った釜に浸し、沸騰させないように注意しながら、糸を練り手早く均等に染め上げる。これを数回繰り返し、水洗・脱水・乾燥させる。

4.3.2 糊付け

染め上がった糸を糊の液に浸してもみ込む。とくに、お召織の場合は緯糸に強い撚(よ)りをかけるので、撚りが戻らないよう糊を十分にもみ込む。次に、糸を張り棒にかけてぎり棒で締め上げ、しごいて糊がむらなく浸透するようにする。

4.4 糸練りから機巻きまで

4.4.1 お召織の場合

(1) お召撚り

糸を糸練り機の縦(かせ)枠にかけ、一定の張力を加えながら糸枠に巻き取る。次に、糸を紡錘(つむ)に収めるため、左撚り・右撚りを区分けしながら管(くだ)に巻き取る。糸を八丁式撚糸機に通し、一定の湿度を保ちながら1メートルに3000回という強い撚りをかけ、左右同時に撚り上げる。

(2) 整経

経糸を糸枠に巻き取り、本数・長さ・密度・順序・幅を決め、糸1本1本の張力を一定に保ちながら太枠に巻き取り、経糸として整える。

(3) 機巻き

図案(デザイン)に合わせて、本数・幅・柄を揃え、糸が乱れないように「はたぐさ」を挟みながら、男巻に巻きとる(図1参照)。

4.4.2 紬織の場合

(1) 糸練り

染色と糊付けのすんだ糸を総枠にかけ、一定の張力を加えながら糸枠に巻き取り、経糸の本数・長さ・幅を決め、立経(たてべ)で整える。

(2) 墨付け

意匠図にしたがって寸法をとり、手くくりのための位置を決め、墨で印をつける。

(3) 餅くくり

柄に応じた大きさ・本数に分けられた経糸・緯糸に染めない箇所を作る作業。白抜きする箇所に染料がしみないように、油紙及び木綿糸を巻いて強くくくりつける。色数が多い餅柄は、くくりとほどもきを何回も繰り返す。

(4) 浸染

手くくりした糸を、染料液に浸して染める。

(5) 柄合わせ

染めた経糸を屋外で長く張って乾燥させ、手くくりをほ

どいて柄を合わせる。次に、意匠図に描いた餅の柄に合わせて染めた経糸を組み合わせ、綾をとる(図2参照)。

(6) 機巻き

糸が乱れないようにはたぐさを挟み、細かく柄合わせしながら男巻に巻き取る。

4.5 製織

経糸を綜統・箆(おさ)に引き込み、経糸と緯糸を一定の基準で交錯させ、織る。餅柄の場合、織り進むうちに経糸がずれていかないよう細心の注意が必要である(図3参照)。

図3 手織機による紬織

4.6 仕上げ

温水に浸して手で丹念にもみ洗いし、撚(ねん)糸加工の際についた糊を落として乾燥させる「湯もみ」の作業をおこなう。手のし機で蒸気をかけながら反物の幅出しをする「湯のし」の作業をして仕上げる。

5. 多摩織のこれから

戦禍(八王子空襲)による壊滅的な打撃や戦後の産業構造の変化に伴う織機の廃棄など、時代の流れに揉まれながらも幾多の困難を乗り越え、先人達は産地の発展と振興に尽くし、平成11年には組合創立100周年を迎えた。

そのような歴史を刻んできた八王子織物も、大正14年のネクタイ生産の開始や昭和32年にはそれまでの着尺原料である生糸にウールが加わり爆発的な人気を呼んだことが、今日の発展のきっかけとなったが、和装着物産地としては昭和45年をピークに、大衆呉服の需要の大幅な減少や経済変動により、生産量は減少を辿っているのが現状である。

一方、八王子織物は「多摩織」の統一名称のもとに昭和55年に通商産業省から、続いて昭和57年には東京都から伝統工芸品の指定を受け、今日も機織職人の手から手へと伝統の技術を守りながら多摩の里で織られ続けている。

いつの時代でもファッション文化は、目まぐるしく変化していく。今日では、「きもの」の需要が伸び悩み、生産の6割以上を紳士や婦人の洋服地やネクタイ・マフラーな

どの洋装品が占めるようになった。

現在、八王子織物の主要製品はネクタイ地であり、国内有数の産地となっているが、バブル崩壊後の景気低迷の長期化に続くデフレ状況の影響に加えて、中国からの低廉なネクタイの大量の流入により、国内ネクタイの市場が急速に狭まり、流通からの受注減少により業者は極めて深刻な状態にある。関係産地間でセーフガードの動きもあったが、大半の業者が事態を冷静に受け止め不参加となった。低価格志向は消費者のニーズであるとの認識は持ちながらも、価格のみではなく、オリジナルなデザイン、高品質の商品を希望する消費者を対象に、小ロット、短サイクル、短納期の市場要請に応じて懸命の努力を行っている。二部問屋又は一部問屋から発注されるネクタイ地の生産が、従来からの主な取引形態であるが、これを阻害せずに、新しい需要を開拓する取り組みを始めた。

組合創立 100 周年を期に、「桑の都」と「Mulberry City マルベリーシティ」ふたつのブランドが誕生した。着物をはじめとした和装関連の商品に展開される「桑の都」、ネクタイやマフラーなどの服飾小物をはじめとした洋装の各

分野に展開される「Mulberry City」、いずれも絹織物に長い歴史と伝統を持つ八王子の自信作である。

服地のグループ・広幅部会では、年に 1 回、東京・原宿表参道の会場で展示会を開催して、市場開拓を行っている。また、ジャパנקリエーションには、商工会議所の繊維部会加盟の他の繊維団体と相携えて出展し、宣伝と商談の機会としている。特に最近のファッショントレンドが、薄地の凹凸感のある生地を求めていることもあって、得意のシルクストールが、市場に受け入れられている。オリジナルな撚糸を使用し、ハイグレードなメンズシルク替上衣用地など高付加価値製品開発の成功例もある。

都心に近い立地は、情報収集等で地の利が生かされる反面、人件費等コスト高で不利な点は否めない。これを克服するには、オリジナル製品の開発と、小ロット、短サイクル、短納期に応える生産体制の確立にかかっていると思われる。

今後とも多摩織の向上のため、技術研究、後継者育成にも重点を置き、技法を生かし現代感覚を取り入れた製品作りを進めるべく努力したいと考えている。

第 55 回熱測定講習会 -- 医薬品の熱分析の基礎と応用 --

主 催：日本熱測定学会 協 賛：(社)繊維学会ほか 会 期：平成 17 年 9 月 7 日(水)～9 日(金)

会 場：大阪大学豊中キャンパス共通教育講義棟(豊中市待兼山町 1-1)プログラム、参加申込の詳細は下記にお問い合わせ下さい

参加申込方法：詳細なパンフレットを下記事務局までご請求ください。パンフレットはホームページにも掲載しております。

問合せ先：日本熱測定学会事務局 〒101-0032 東京都千代田区岩本町 1-6-7 宮沢ビル 601

TEL：03-5821-7120 FAX：03-5821-7439 E-mail：netsu@mbd.nifty.com <http://www.soc.nii.ac.jp/jscta/index.html>

セルロース学会第 12 回年次大会

主 催：セルロース学会 協 賛：(社)繊維学会、高分子学会、日本化学会、日本木材学会、紙パルプ技術協会

会 期：平成 17 年 7 月 21 日(木)～22 日(金)

会 場：九州大学医学部 100 年講堂(福岡市東区馬出 3 丁目、地下鉄貝塚線、馬出九大病院前駅から徒歩 3 分)

講演内容：セルロースおよび関連科学の基礎および応用開発研究

形 式：口頭発表(OHP または液晶プロジェクターを使用)およびポスター発表

参加費(要旨集含む)：参加費は当日申し込み会員 6,000 円、会員外 9,000 円、学生 3,000 円です。

特別講演：法人化と大学の使命 - 九州大学のアクションプラン - 梶山千里 九州大学総長

懇親会：7 月 21 日(木)18 時より 九州大学同窓会館(九州大学医学部 100 年講堂裏)。懇親会参加費は、当日登録分で一般 6,000 円、学生 3,000 円となります。

大会スケジュール：学会ホームページ(<http://www.soc.nii.ac.jp/cs33/nenji12.html>)にて、大会プログラムをご覧ください。

連絡先：〒812-8581 福岡県福岡市東区箱崎 6-10-1 九州大学大学バイオアーキテクチャーセンター内 セルロース学会第 12 回年次大会事務局 総務 近藤哲男 tekondo@agr.kyushu-u.ac.jp TEL & FAX：092-642-2997

運営委員会：委員長：森田光博(九大院・農) 総 務：近藤哲男(九大・バイオアーキテクチャー) 委 員：岡島邦彦(徳島文理大・工)、北岡 卓也(九大院・農)、櫻井 和朗(北九州市大・国環工)、世利 桂一(ふくおか IST)、高田 晃彦(九大院・総理工)、細川 純(産総研・四国)、本郷 智子(旭化成ファーマ)、吉村 利夫(福岡女大・人間環境)